

【佳作】

声をかけるまで

松本唯似（大阪府 大阪府立高津高等学校 1年生）

それはまさしく、僕にとって『大事件』であった。もちろん、こんなに冴えない僕の人生にも、小さな事件はたくさん起こる。星占いが最下位だったとか、たんすの角に小指をぶつけたとか、目の前で楽しみにしていた新発売のパンが売りきれてしまったりとか。でも、今回のはわけが違う。

日曜日、特に趣味もない僕はいつものように喫茶店『ぼえむ』に向かった。そこは自宅から徒歩五分ほどで、少しレトロな雰囲気のある小さなお店なのだけど、そのマスターの出してくれるケーキとコーヒールはとてもおいしい。僕はそのお店を見つけてから毎週のように通い、今ではすっかりこのお店の常連なのだった。

今日もマスターにブレンドコーヒールと最近お気に入りのいちじくのタルトを頼んで、カウンター席の左から二番目に腰かける。僕の特等席。そんなことを思いながらぼんやりしていると、カランコロン、とドアの開く音がして（この店のドアにはベルがついていて、誰かが入ってくる度に音がなる。なんだかとても懐かしい感じの音で良い）見なれない女性が入ってきた。もうお気付きだろうが、そう、この女性こそが僕の『大事件』なのだった。ま

さにドストライク。胸あたりまで伸ばしたサラサラの黒髪はもちろんのこと、すっととおった小さな鼻や控えめな唇も素晴らしい。目はくっきりとした二重、でも強すぎず、儂げな雰囲気をもしだしている。神様がもし人間をお作りになっているのなら、彼女こそがキングオブヒューマンだと呼びだすほど、彼女はとても美しいのだ。

彼女はカウンター席の右から四番目に座ると、細く白い手でメニューを開いた。僕からは、ちょうど横顔が見える位置。目が合ってしまわないように、僕はちらちらとその美しい横顔を見つめた。僕自身、これが何であるか位とくに気付いている。二十五歳独身でサラリーマンの僕は、唐突に恋をしてみたのだ。名前も知らない彼女に。

「ブルーマウンテンと、いちじくのタルトをお願いします」  
ああ、もうどうなっているんだ。声まで綺麗だなんて。確信が持てた、やはり彼女はキングオブヒューマンだ。いや、女性だからクイーンオブヒューマンか？ヒューマンじゃなくてウーマン？いや、そんなことは今どうでもいい。

僕が彼女に見とれている間に、マスターのいれてくれたコーヒールを口を含みつつ、僕は一度冷静になることに努めた。そして、早くも僕の頭は、彼女の美を賞賛するモードからどうやって彼女に話しかけるかモードに変わりつつある。

二十五歳独身で彼女もいないとなるとさすがに察しがつくと思うが、僕はかなりの人見知りで、特に女性に対しては固まって話せないレベルなのだ。それが好みのタイプの女性なら尚更である。だから、今までいいな、可愛いなと思う女性に出会っても、もちろん声をかけることなくあきらめてきた。まあ、好きなわけ

じゃないし、と自分に言いわけをしていたのかも知れない。だが、今回はそうはいかない。僕の体の中の細胞という細胞がこの人だと叫んでいて、僕も叫びだしたい位になっていた。なんとかして、僕のこの少ない言葉のひき出しから文章を作り出して、彼女に話しかけなければ。彼女がブルーマウンテンを飲み、いちじくのタルトを食べ終えてしまう前に。

しかし、話しかけるといっても、どんな話がいいのだろう。そもそも、タイミングは？もし仮に、彼女がいちじくのタルトを飲み込もうとした瞬間に話しかけてしまったとすれば、彼女は知らない男に声をかけられたことに驚き、タルトのかけらが喉に刺さって死んでしまうかも知れない。いや、死んでしまうは言いすぎかも知れないが、どちらにせよこの店にこの時間帯に一人で来ている時点で、一人の時間を楽しみたいに決まっている。そうなれば、ゆっくりコーヒをたしなむ空間に二十五歳独身彼女なしの男が入ってきたらどうだろう。彼女の美しい顔が不快感でゆがむことは間違いない。

脳内審議会の結果、一番害が少ないと予測される帰りに話しかけることが決定した。タイミングが決まれば、次は話題なのだが、僕は話題を振るのが壊滅的に下手クソである。どのくらい下手かという点、高校のとき無理矢理連れていかれた合コンで、おとなしそうな女子にお前はとにかく黙っとけ、といわれるくらいに下手である。更に、僕の一番のトラウマは、高校一年生の冬、中学から想い続けてようやく付き合えた二週間後、その子本人から

「あなたといると一時間が二百分に感じる」

と言ってふられたことだ。その日は丁度クリスマスマスの二日前で、プレゼントに用意していたネットワークスを姉貴にさわやかに渡すと

いう悲しい過去が僕にはある（姉貴はとても喜んだ）。そんな僕が話題を考える状況になるなんて、夢にも思っていなかった。だが、なってしまったものは仕方がない。考えよう。

話題を考えながら彼女の方をちらりとうかがうと、彼女はもういちじくのタルトを三分の二ほど食べてしまっていた。ブルーマウンテンは僕からして奥の方に置いてあるのはつきりとはわからないが、おそらく半分ほどしか残っていない。これはまずいと焦る僕の前には、手のつけないいちじくのタルトと冷めてぬるくなったコーヒ。頭をフルに活動させながら、いちじくのタルトを口へ運ぶ。まだ話しかける内容も決まっていないうちに、緊張のせいで美味しいはずのタルトの味は全く感じなくなっていた。よくわからない物体を口に入れていよう、僕は冷めたコーヒで一気に流しこんだ。彼女をちらりと見て、話題を考え直そうとした、そのとき。

「ごちそうさまでした」

鈴のような高めの美しい声とともに、彼女は席を立った。嘘だろう。まだ、何も思いついていないというのに。

僕は絶望的な気持ちで彼女の背中を見つめる。僕はなんてふがないんだらう。一生に一度の出会いだということは頭の中で十分に理解しているというのに、僕の体は動かさず、ただ見つめることしかできない。神様はきっと僕をお作りになるとき、勇気のパウダーを入れ忘れたに違いないと思う。それから、イケメンになれる木の実も。そんな下らないことを考えているうちに、彼女はベルの音を残して店を出てしまった。

それから七日後、僕は人生最大に緊張する日曜日を迎えた。あの運命の日から、もしかするとまた彼女が店に来るかもしれないという淡い希望を抱いて、この一週間を乗り切った。そして、と

うとう今日、僕の運という運が試されるときである。僕は時間つぶしに駅前のおいで今日の運勢を見てもらったのだけど、今日は勇気を出しても大丈夫な日、らしい。これはもう世界の男ワースト一位の僕でも頑張らなきゃいけないときだと強く思う。

三月だというのに緊張のせいで汗ばんだ手でドアを開ける。彼女はいるだろうか？どきどきしながら店内を見まわしたけれど、彼女の姿はなかった。いるのは、決まって午後三時に現れる僕が二時に来たというのに驚いているマスターだけ。

「早いね」

「今日は…ちょっと…いえ」

口数の少ないマスターが話しかけてくれたものだから、僕はびつくりしてうまく返せなかった。大丈夫だろうか。こいつ、先週の綺麗な女性に会いに来たんだろな、とか思われていないだろうか。そんなことを思いながら、ブレンドコーヒート、新作のオレンジケーキを注文した。

そして、ちょうど僕がいたてのコーヒートを口に含んだときである。彼女が来た。彼女が現れた。彼女が登場した！僕は嬉しさのあまりふきだしそうになったコーヒートをなんとか抑えつつ、一週間ぶりの彼女の美しい姿を目に焼きつけた。彼女が来たことによって、すでに僕の頭の中は花畑状態であり、蝶まで舞っている始末である。もし仮に僕が今病院に行つたとすれば、医師は迷うことなく恋煩い、もしくは彼女大好き症候群だと診断するだろう。そのくらい、僕の頭は今彼女でいっぱいなのである。

「キリマンジャロと、オレンジケーキで」

彼女の澄んだ声が店内に響く。どこから声を出せばあんなに美しい声が出るんだろうか。

彼女の美しさを堪能した後、僕は真剣に話題について考え直さ

なければならなかった。実は、もし彼女が来て、ブルーマウンテンかいちじくのタルトを頼んだならば、好きなんですか、と尋ねようと思っていたのだ。しかし、今回頼んだのはキリマンジャロとオレンジケーキ。僕の一週間成熟させた話題は、一瞬にして無意味になってしまったのである。

僕はオレンジケーキを口に入れて、深く考えた。今まで、初対面の人と話さなければならなかったとき、どんな話をすれば盛りや上がっていたか、または、相手がどんな話をしてくれたら答えやすかったか。僕の頭のひきだしからなんとか探し出そうとするも、これならいける、という話題は見当たらなかった。それもそのはずである。話すのが下手な駄目男が、しゃべったこともない美しい女性に話しかけようとするだなんて、ドラマのワンシーンにも使えないような異様な光景であるのに、それに使えそうな話題なんて当然あるわけがなかった。

こうなったら、もう勢いで行くしかない。僕の考えた作戦はこうだ。まず、彼女が立ち上がった瞬間、僕は頭で何も考えずにとりあえず立つ。彼女はそのままレジに行つてお会計をするだろうから、僕もその後ろに並んで、彼女がお会計を済ませたそのときに、声をかける、というものだ。話題はもうその場で思いついたもので良い。占いで、今日は勇気を出すのに絶好の日と出ているのだから、勇気さえ出せば神様がなんとかしてくれるだろう、という投げやりな考えに至った。

いやでもしかし、本当にそれでいいんだろうか。そもそも、一緒のタイミグで立つなんて、いくら偶然を装ったとしても自然なのでは？気持ち悪いと思わないだろうか。僕の心の中に不安がもくもくとわき始めたその時、彼女が、立った。まだキリマンジャロは残っているというのに、なぜ？好きな味ではなかったの

だろうか。いや、今はそんな場合ではない。勇気を出せ、僕。ファイト、僕！

午後三時十一分、僕は席を立つことに成功した。ゼンマイじかけのロケットのように、彼女の少し後ろをついていく。心臓はもはやとびちって星にでもなってしまうんじゃないかというくらい速く動いているし、顔は尋常じゃないほど熱い。でも、僕は勇気を出せた。あともうひと頑張りだ、耐えるんだ！そんな僕の葛藤を知らない彼女は、レジに並んだ、と思いきやそのまま通り過ぎて、トイレのドアの奥に消えていった。まさかそんな馬鹿な。僕はレジの前で、呆然と立ちつくした。

「…お会計、ですよね？」

ぼんやりしている僕を、マスターが不思議そうに見つめる。今さら、席に戻ることはできない。今日の戦いは終わってしまった。いや、僕が無駄な勇気を出したために、自分から戦いを終わらせたという形になってしまったのである。僕は人生で初めてトイレに殺意が芽生えつつ、七百五十二円を支払った。勇気なんて出さずものじゃないし、占いなんて信じるものじゃないな、とも思った。一週間は長いようで短い。今日は、土曜日だ。もちろんあんな失敗をしたからといってちんぷいぷいや変なマシーンで時間を戻せないことは、ファンタジーをこよなく愛す僕でもさすがにわかってる。あの日からもう六日もたっているなんて信じられない。老いて怖いなあと思う。まあ僕は、まだ二十五歳の若僧で、老いを語るほどの歳ではないのだけだ。さて、僕は今どこにいるのかというと、親友の田辺の家にお邪魔していた。田辺は、僕が中学のときからの付き合いなのだけど、僕はそのときから困ったことがあればジャンルを問わず田辺に相談してきた。なぜかという、理由はものすごく単純で、田辺がかなりの完璧人間モテ

男だからである。成績優秀でスポーツ万能、モデルをやっているお兄さんの弟で、おまけにすごくいい奴。そんな田辺と僕の仲良くなっただけは、中学一年生の秋のことである。校外学習の活動班で、僕と田辺は偶然一緒になり、たまたま盛り上がった恋バナで、僕と田辺の好きな子が一致してしまったことが大きなきっかけだった（クリスマス二日前に僕をふった女の子とはまた別の子である）。僕の好きになる子なので、お察しの通りおとなしめのあまり目立たない性格の子なのだけど、困った人を放っておかず、自分のことはそっちのけにしてしまうような優しい子だった。僕と田辺はそんな彼女の優しさにひかれていたし、他の誰も気付いていないと思っていた彼女の魅力を知っていた同士として、僕と田辺はそのときすでに『こいつとは気が合う』と感じていたのだった。そのことをきっかけに、僕は彼女の事でよく話すようになり、互いの趣味が一緒だったこともあって、いつのまにか親友になっていった。二人が好きになった彼女はというと、もちろん、僕を好きになるわけもなく田辺と付き合い出した。僕は少々苦しい思いをしたけれど、田辺の嬉しそうな顔を見て僕も嬉しくなったし、彼女を好きになったおかげで田辺と仲良くなれたから、僕は十分幸せだと思った。

そして、僕が今日久しぶりに田辺に会って何を相談しようとしているのかというと、紛れもなく明日の作戦についてである。勢いでも駄目、真面目に考えても駄目となれば、僕はもう田辺に泣きつくしかなかった。

「この歳で一目ぼれだあ!？」

「うるさいな、笑うなよ」

田辺は笑ってねえよと言いつつ、完全に笑いをこらえた変な顔をしている。失礼な奴だ。

「運命の出会いだと思っただよ、お前しか望みがないんだよもう！」

「いやっ…いやいやお前待って待って！うんっ…運命で…」

「真面目に言ってんだよ！」

お腹を抱えて大爆笑する田辺を睨みながら、僕は必死につめ寄った。

「わかったわかった、考えるよ」

田辺があぐらをかきなおして、僕は少しほっとした。これは、田辺が脳内を真面目モードに切りかえた時にするくせだからだ。

「でもな、正直に言うのと、いい話題とかないと思うぞ？お前が逆の立場だったら、どう思う？知らない女の子が、『あのおっけーキ好きなんですかあ？』って話しかけてきたら」

女子のものまねをしながらくねくねする田辺への笑いをこらえつつ、僕はそのシチュエーションを脳内で再生してみた。確かに、かなり怖いし、僕だと逃げるレベルだ。田辺は僕の目をまっすぐ見つめつつ、

「な？怖いし、ちょっと引くだろう？」

と大真面目な顔で言った。

「じゃあどうすればいいんだよ」

「だから、ストリートに言えばいいじゃん。一目ぼれしました、よかつたらお友達になってくれませんかっつて」

馬鹿なのか。そんなこと言えるわけがない。そんなこと言う方がよっぽど…

「そんなこと言う方がよっぽどキモいって思っただろう？でもなあ、理由もわからず近寄ってくる異性ほど怖いものはないぞ。それに、一目ぼれしました、って言われるのが憧れな女子多いし」女の子は少女漫画好きだからな、と田辺は言う。こいつのすごい

所は、こんなにめちゃくちゃな戦法を、僕にうまく納得させられるところだ。もう僕の頭の中ではすでにその作戦でいこうと決定している。

「でもお前、喫茶店に毎週行くとかよっぽどコーヒー好きなんだな」

「知らなかった？コーヒー好きだよ」

「俺の彼女もコーヒー好きだからさ、おすすめの店ないか聞いとくわ」

さりげなく彼女の自慢をいれてくるところも、中学の頃から何も変わっていない。ある意味こいつは変わらないから、僕でも話しやすいのかもしれない。僕は唯一の親友にお礼を言いつつ、改めてこいつと知り合えて良かったと思った。

心の準備はできていた。タイミングは彼女がレジに並んだとき（立ち上がったただけだとトイレの可能性もあるため）、台詞は、「一目ぼれしました、良かったら友達になって下さい」

である。決まってしまうえば、もう怖いものはない。僕は今のところ、二戦二敗状態になってしまっているの、やはりここは男として、決めなければならぬときであると思う。今日は絶対に、弱気にならない、ネガティブにならないと決めていた。だから、今日に限って星占いが十二位でも、道中の石で転んで小学生に笑われても、そのせいで汚れた新品のポロシャツを着替えにいかなければならなかったことも、気にしないことにした。

店のドアを開けると、彼女はもう来ていた。彼女以外にお客さんがいないことを確認して、僕はラッキーだと思った。あんなに恥ずかしい言葉を言うのに、他の人に聞かれるだなんて考えたただけでも死にそうである。でも、これで運を使ってしまったとしたら？いやいや、今日はネガティブにならないと決めてるんだ。そ

んなことを思いながらブレンドコーヒーといちじくのタルトを頼んで席につく。お腹が痛い。薬を持ってくれば良かったと思う。彼女の美しい口元にケーキとコーヒーが運びこまれる度に、心臓は跳ね上がる。どんどん近づいてくるその瞬間に僕は胸を高鳴らせ、彼女に拒絶されるかもしれない恐怖で僕は震えていた。今まで感じたことのないおそろしさに押しつぶされそうになりながら、僕は気持ちを落ちつけるために田辺に連絡しようとスマートフォンを出した。さすが田辺、気遣いのできる男。不安になる僕を予測して送ってくれたのか、田辺からメールが届いていた。僕は飛びつくようにメールを開く。文章は、

『彼女が言うには、ぼえむって店が一番うまいらしいぞ。今ちょうどその店にいるみたいだから、勝負が終わったら行ってみな。見たがって俺の彼女が見れるぞ』

僕は店内を見まわした。お客さんは、さっきも確認したとおり、僕と彼女しかいなかった。と、いうことは。でも、まさか。

彼女が席を立った。そのままレジへ向かう。言わなきゃ。また、田辺の彼女と決まったわけじゃないんだから。『ぼえむ』って店が、もう一軒あるだけかもしれないんだから。どんな言いわけを並べても、僕の体は動かなかった。

彼女がベルの音とともに店を出るのを見送った直後、メールが届いた。田辺からだった。

『彼女、もう店出たみたいだわ。俺の愛しの彼女を見るのはまたの機会だな、今日頑張れ』

もう勝負は終わったんだよ、田辺。いや、そもそも、土俵にすら立っていなかったのかもしれない。

帰り道、駅前でチラシを渡された。新作のパンについてのチラシだった。いつもなら急いでパン屋へ走っていたけど、今日は絶

対に売り切れている気がして、僕はパン屋とは反対方向の道で帰ることに決めた。